

# 六朝隋唐の王后・王太子号について 禅譲における事例を中心に

著者	柴 棟
雑誌名	集刊東洋学
巻	120
ページ	1-21
発行年	2019-01-24
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/00132791">http://hdl.handle.net/10097/00132791</a>

# 六朝隋唐の王后・王太子号について

—— 禪讓における事例を中心に ——

柴 棟

はじめに

一 六朝隋唐における王后・王太子号の諸例

「禪讓」は王朝交替の重要な方式として、特に中国の六朝隋唐（魏晉南北朝隋唐）において重要な意義を有している。王莽は「周公輔成王」の故事により、摂政となつて皇帝位を手に入れた。曹魏は禪讓によつて魏王朝を開き、後の六朝隋唐の各王朝はこの方式に倣つた<sup>1</sup>。この禪讓制度については研究成果の蓄積があるが、禪讓の前における受禪者の嫡妻や嫡嗣の名号については研究が少ない。管見の限り、周国林氏の考論において禪讓の前における権臣の嫡妻や嫡嗣の名号の改変について言及しているが、その改変の持つ意味については詳しく説明していない<sup>2</sup>。

そこで本稿では、六朝隋唐における王后・王太子号の諸例と王后・王太子号の沿革を整理した上で、その役割を分析し、六朝隋唐の禪讓政治に焦点をしばって検討したい。

漢の延康元年（二二〇）十月、魏王曹丕は漢献帝から禪位され、黄初に改元した。漢魏王朝の交替は禪讓によつて完成し、このモデルが中世王朝交替の主要な方式になった。ただし、漢魏の禪讓は一日にしてならず、その間に長い準備が必要とされた。この過程の中で、曹丕の父曹操の爵位や礼遇は絶えず引き上げられた。以下、『三国志』卷一・武帝紀によつて簡単な整理を行う。

〔建安〕十七年（二二二）春正月、（中略）賛拜不名、入朝不趨、劍履上殿、如蕭何故事。

〔建安〕十八年（二二三）五月丙申、天子使御史大夫郗慮持節策命公為魏公曰、（中略）加君九錫。（中略）錫君軒鼎之樂、六佾之舞。

〔建安〕十九年（二二四）三月、天子使魏公位在諸侯王

1 六朝隋唐の王后・王太子号について（柴）

上、改授金璽、赤紱、遠遊冠。(中略)十二月、(中略)天子命公置旄頭、宮殿設鐘虡。

〔建安二十一年(二二六)〕夏五月、天子進公爵為魏王。(中略)天子命王女為公主、食湯沐邑。

〔建安二十二年(二二七)〕夏四月、天子命王設天子旌旗、出入稱警蹕。(中略)冬十月、天子命王冕十有二旒、乘金根車、駕六馬、設五時副車、以五官中郎將丕為魏太子。<sup>3)</sup>

〔建安二十四年(二一九)〕秋七月、以夫人卞氏為王后。<sup>4)</sup>

これによると、建安二十二年十月、曹操への礼遇は極点に達し、皇帝とは同じになったため、爵位を追加することはこれ以上できなくなった。そこで、尊貴を示すためには妻子の番号を変えるしなくなり、曹操の嫡子と嫡妻の番号は(王)太子・王后になった(後述するように、諸王の嫡妻の番号は後漢以後は王妃であり、諸王の嫡子の番号は曹魏以後は世子である)。

曹操が魏王に昇進してから間もなく、劉備は建安二十四年七月に漢中王についた。彼の妻子の番号は王后・王太子になった。章武元年(二二一)、劉備が皇帝位についた後、彼の妻子の番号も皇后・皇太子と改称した。<sup>5)</sup>孫権の状況も同じである。黄初二年(二二二)十一月、曹丕は太常の邢

貞を派遣して孫権を大將軍に任命し、呉王に冊封し、九錫を与えた。<sup>6)</sup>それと同時に、孫権は孫登を王太子に冊立した。<sup>7)</sup>黄竜元年(二二九)、孫権が皇帝位についた後、彼の嫡嗣の番号は皇太子と称した。<sup>8)</sup>孫権は王位・皇帝位についた時に、群臣は夫人の徐氏を后に冊立しよう上奏したが、彼は歩氏を后に冊立することを望んだため、十余年の間、后を冊立することがなかった。<sup>9)</sup>こうした特別な理由がなければ、孫権は呉王になった時に王后を冊立する可能性もあった。いずれにせよ、これらの冊立は漢・魏の皇帝の承認を得ることなく、彼らが自ら決定したことであり、この点は曹操の状況とは異なる。

漢魏王朝の交替は、曹氏父子二代の努力により、最終的には禪讓方式で実現された。この方式は司馬氏にも採用される。そして、魏晋交替の時期にも、嫡妻と嫡嗣の番号について漢魏交替の際と同様の改変が為された。咸熙元年(二六四)三月、司馬昭は王位につき、同年十月、司馬炎を晋世子にした。<sup>10)</sup>その後の咸熙二年(二六五)五月、『三国志』卷四・三少帝紀には、以下の記載がある。

命晋王冕十有二旒、建天子旌旗、出警入蹕、乘金根車六馬、備五時副車、置旄頭雲罕、樂舞八佾、設鐘虡宮鼎。進王妃為王后、世子為太子、王子・王女・王孫、爵命之号如旧儀。

これによると、晋王の司馬昭が天子と同格の礼遇を有した後、彼の妻子の名号に漢魏交替の際と同様の改変が為されたことを窺える。ここの「旧儀」は漢魏禅譲前の名号制度であり、『晋書』卷二・文帝紀はこれを「帝者之儀」と記載する。ここに至り、晋王はまもなく皇帝位につく。

八王の乱と永嘉の乱を経て、司馬睿をはじめとする僞姓士族は南渡して政権を樹立したのち、北方の胡族政権を打倒することを望んでいた。建武元年（三一七）春二月辛巳、司馬睿に皇帝位を継承させるために、愍帝は平東將軍の宋哲を遣わして詔書を持って江南へ行かせた。ただし、司馬睿はすぐに即位せずに何度も辞退した。

しかし、「魏晋故事」を援用して晋王位につき、大赦、改元を行った。その直後に王世子の司馬紹を晋王太子に冊立した。王妃の虞氏は永嘉六年（三二二）に死去したが、虞氏を王后に追尊し、その上で有司は王后のために廟を立てようと上奏した。この時、司馬睿は帝王ではなかったが、既に帝王としての実質を得ており、あとは名号を改変するだけであった。太興元年（三一八）三月、愍帝の崩御を知り、同月丙辰に司馬睿は皇帝位につき、その十四日後の庚午に王太子を皇太子に冊立した。その後、太興三年（三二〇）八月戊午に、敬王后の虞氏に敬皇后を追尊した。このことから見ると、司馬睿は「魏晋故事」を援用して晋王位

についた後、彼の妻子の名号を王妃・王世子から王后・王太子に改称している。これらは帝王の実質を持ちながらも帝王でない人物が皇帝位につく前に、彼の妻子に与える專用の名号であった。

元興二年（四〇三）十一月、桓玄が禅譲によって晋を篡奪する前も、彼の妻子の名号は上述と同様に改変された。『晋書』卷九・桓玄伝には、以下の記載がある。

玄矯制加其冕十有二旒、建天子旌旗、出警入蹕、乘金根車、駕六馬、備五時副車、置旄頭雲罕、樂舞八佾、設鐘虡宮鼎、妃為王后、世子為太子、其女及孫爵命之号皆如旧制。

これによると、楚王の桓玄が天子としての諸々の礼遇を獲得した時、あわせて彼の妻子の名号も改変している。ここの「旧制」はかつての王朝禅譲の前段階における権臣の妻子の名号制度を指す。

以上のような名号の改変は五胡十六国時代にもよく見られる。例えば、大興二年（三一九）に劉曜が石勒を趙王に封じようとした事例がある。その時劉曜は「曹公輔漢故事」に倣い、「出入警蹕、冕十有二旒、乘金根車、駕六馬」などの礼遇を与え、彼の夫人・世子を王后・太子に冊立しようとしたが、石勒の舍人曹平樂が石勒に叛乱の意志があることを進言すると、劉曜は封賞を止めた。これに対して、

石勒は不満を示して令を下し、「趙王・趙帝、孤自取之、名号大小、豈其所節邪。」と述べたという。<sup>(16)</sup>咸和七年(三三二)、石弘は石虎を丞相・魏王・大单于に封じ、九錫を賜り、彼の妻子の名号は王后・太子とされた。<sup>(17)</sup>咸康三年(三七)、慕容皝が燕王についた際も、「魏武・晋文輔政故事」に倣い、妻子の名号を王后・太子に改めている。その後、秃髮儁檀が王位についた時もまた、その妻子の名号が王后・太子に改められた。<sup>(18)</sup>以上の例を見ると、このような名号の改変は漢族政権だけでなく、胡族政権でも通行した。この名号は、皇帝になる野望を持つ者が正式な称帝の前に、彼らの妻子に与える名号となった。

南北朝時代の禪讓前にも、上述の名号の改変がよく見られる。はじめに南朝の事例から見ていく。元熙元年(四一九)七月、劉裕が宋公から宋王となり、同年十二月、晋恭帝は天子の種々の礼遇を劉裕に賜った。『宋書』卷二・武帝紀中には、以下の記載がある。

天子命王冕十有二旒、建天子旌旗、出警入蹕、乘金根車、駕六馬、備五時副車、置旄頭雲罕、樂舞八佾、設鐘虡宮鼎。進王太妃為太后、王妃為王后、世子為太子、王子・王孫爵命之号、一如旧儀。

劉裕の生母の趙安宗は興寧元年(三六三)に彼を生んだ、後に病死した。<sup>(20)</sup>その後、劉裕の父親である劉翹は蕭文寿を

後妻として娶った。この蕭文寿が前引史料中の王太妃・太后である。劉裕が宋公となる以前に、豫章公に冊封されると、蕭氏は豫章公の太夫人となり、劉裕が宋王につくと、蕭氏は王太妃となった。<sup>(21)</sup>劉裕が上述の天子の礼遇を獲得した後、蕭氏は王太后となったのである。永初元年(四二〇)六月、劉裕が皇帝位につき、蕭氏が皇太后となるまで、王太后の名号は六ヶ月の間使用された。そして、義熙四年(四〇八)、劉裕の嫡妻の臧愛親は死去し、その後豫章公夫人を追贈されていたから、前引史料の王妃・王后はこの臧愛親であり、豫章公夫人と同様、追贈されたものと考えられる。前引史料の世子・太子は劉裕の息子の劉義符であり、彼は十歳の時に豫章公世子に冊立され、宋台を立てた時に宋の世子に冊立され、元熙元年(四一九)に宋の太子に冊立された。<sup>(22)</sup>永初元年六月、劉裕が皇帝位につき、その後の八月に、臧氏は皇后を追諡され、劉義符は皇太子に冊立された。<sup>(23)</sup>

昇明三年(四七九)四月壬申、蕭道成が齊公から齊王になった。十四日後の同月丙戌、宋順帝は天子の種々の礼遇を蕭道成に賜った。『宋書』卷一〇・順帝紀には、以下の記載がある。

命齊王冕十有二旒、建天子旌旗、出警入蹕、乘金根車、駕六馬、備五時副車、置旄頭雲罕、樂舞八佾、設鐘虡

宮県。進世子為太子、王子・王女・王孫爵命之号、一如旧儀。

また、この名号について、『南斉書』卷一・高帝紀上には、以下の記載がある。

王世子為太子、王女・王孫爵命一如旧儀。

ここでの世子・太子は蕭道成の嫡子の蕭蹟である。彼は齊国が立てられた時に世子に冊立され、その後王太子に冊立され、宋斉の禪讓が完了した後に、皇太子に冊立された。なお、王妃を王后に冊立する記載が見られないが、その原因は蕭道成の妻劉智容が泰豫元年（四七二）に死去していたからである。その後、劉氏は昇明二年（四七八）に「竟陵公国夫人」と追贈され、昇明三年（四七九）に「齊国妃」と追贈され、建元元年（四七九）に「昭皇后」と尊諡された。<sup>(28)</sup>なぜ劉氏は王妃から王后に追諡されなかったか。それは、蕭道成に上引の礼遇や名号が与えられた僅か五日後の同月辛卯に、宋順帝は禪讓の詔書を出しており、禪讓をあまりに短期間のうちに完遂したため、劉氏を王后に追諡する時間的余裕がなかったからであろう。

中興二年（五〇二）三月癸巳、蕭衍が梁公から梁王となり、同月丙午、<sup>(29)</sup>齊和帝は天子の種々の礼遇を蕭衍に賜り、彼の妻子の名号も改めた。『南斉書』卷八・和帝紀には、以下の記載がある。

命梁王晃十有二旒、建天子旌旗、出警入蹕、乘金根、駕六馬、備五時副車、置旄頭雲罕、樂舞八佾、設鐘簠宮懸。王子・王女爵命一如旧儀。

また、この名号について、『梁書』卷一・武帝紀上には、王妃・王子・王女爵命之号、一依旧儀。

とある。明らかに、『梁書』では「王妃」という記述が加えられている。蕭衍の夫人の都徽は永元元年（四九九）八月に死去しており、蕭衍が梁公位についた後、梁公妃に追贈された。そして、皇帝となった時、皇后に追崇された。<sup>(31)</sup>これまでの前例によれば、蕭衍の爵位や礼遇が格上げされた際に、彼の正妻に名号を追贈した可能性がある。その上、齊和帝が禪讓を行ったのは、蕭衍が上述の礼遇や名号を与えられた十日後の丙辰であった。<sup>(32)</sup>時間的余裕から、郗氏に相応しい名号を追贈することは可能であった。加えて、『梁書』には、「王妃」という記載が見られる。ところが、上述の『南斉書』・『梁書』に世子・太子という記載が見られない。その原因は、蕭衍の長男である蕭統はその時わずかに歳だったことにあるだろう。齊梁禪讓の後、有司が儲副を冊立することを上奏した時に、梁武帝の蕭衍は「天下始定、百度多闕」を理由とし、上奏を受け入れなかった。その後、群臣の強烈な要求のもとで、天監元年（五〇二）十一月に蕭統を皇太子に冊立した。<sup>(33)</sup>

太平二年（五五七）十月戊辰、陳霸先は陳公から陳王となり、同時に、梁敬帝は天子の種々の礼遇を陳霸先に賜った。『梁書』卷六・敬帝紀には、以下の記載がある。

命陳王冕十有二旒、建天子旌旗、出警入蹕、乘金根車、駕六馬、備五時副車、置旄頭雲罕、樂舞八佾、設鐘虞宮。王后・王子女爵命之典、一依旧儀。

また、この名号について、『陳書』卷一・高祖紀上には、

王妃・王子・王女爵命之号、陳台百官、一依旧典。

とある。続いて、三日後の辛未に、梁敬帝は禪讓の詔書を出した。右の史料に王妃や王后の記載が見られるが、世子・太子の記載が見られない。何故なら、陳霸先の世子克が死去しており、陳霸先が陳公から陳王に冊封されてから（同時に天子の礼遇を獲得した）、梁敬帝が禪讓の詔書を出すまでの時間が三日と非常に短いため、世子克を太子に立てる時間にも必要性もなく、陳霸先即位後に追贈することも可能だったからである。そして、彼は皇帝位についた後、世子克に孝懷太子を追贈した。<sup>(35)</sup> 陳霸先の前夫人錢氏は前に死去したが、後妻として章氏がいた。陳霸先は侯景の乱を平定して長城県公に封ぜられた時に、章氏は夫人を拜している。<sup>(36)</sup> これまでの前例に従えば、上述の過程において彼の正妻章氏の名号を変えた可能性がある。しかし、『梁書』と『陳書』の記載は一致せず、前者は「王后」、後者は「王妃」

である。『陳書』卷二・高祖紀下によると、陳霸先即位後、十月辛巳の条には「立夫人章氏爲皇后」とあり、皇后となる前の名号は王妃・王后ではなく夫人であった。では、章氏の名号の記載はなぜこのように混乱したのだろうか。

その混乱の原因は、陳霸先が陳公から陳王になった日と天子の礼遇を獲得した日とが同じであり、そして、その後僅か三日にして梁敬帝が禪讓の詔書を出したと密接な関係がある。この過程における陳霸先の王爵は以前のような二つの段階、即ち第一段階で王となり、第二段階で天子の礼遇を得るというプロセスを経たわけではなく、第一段階から即座に皇帝と同格の礼遇を獲得している。そのため、彼の嫡妻の名号も二段階を経ることなく、王后に変更されたと考えられる。二つの史籍は異なる側面に重点を置き、『梁書』の王后は変更後の名号を記し、『陳書』の王妃は変更前の名号を記したのであろう。このように考えると、太平二年（五五七）冬十月戊辰、陳霸先は陳公から陳王になって天子の礼遇を獲得した後に、「旧儀／旧典」によって、彼の嫡妻の名号を「王后」と称したはずである。

次に北朝の事例を見ていこう。齊文襄王の高澄が死去した後、武定八年（五五〇）三月庚申、孝靜帝は齊郡王の高洋を齊王に冊封した。同年の五月甲寅、『魏書』卷一二・孝靜帝紀には、以下の記載がある。



詔齊王為相國、綏百揆、封冀州之勃海・長樂・安德・武邑、瀛州之河間・高陽・章武、定州之中山・常山・博陵十郡、二十萬戸、備九錫之礼。以齊國太妃為王太后、王妃為王后。

これによると、魏齊禪讓以前に、高洋の母親や嫡妻の名号に変更があった。なお、ここに太子の記載が見られない原因は、当時高殷が六歳とまだ幼く、世子に冊立されなかったからである。孝靜帝は高洋が上述の礼遇や名号を与えられた二日後の同月丙辰、禪讓の詔書を出した。<sup>(38)</sup>そして、高洋は皇帝位につき、五月辛酉に王太后を皇太后に尊し、六月丁亥に高殷を皇太子に冊立して、王後の李氏を皇后に冊立したのである。<sup>(39)</sup>

大定元年（五八一）二月丙辰、周靜帝は楊堅に天子の礼遇を与えると同時に、禪讓の詔書を出した。その時、楊堅の妻子の名号に変更があった。『隋書』卷一・高祖紀上には、『王妃為王后、長子為太子』<sup>(40)</sup>とある。これに対して、『周書』卷八・靜帝紀には、『王后・王子爵命之号、並依魏晉故事』とある。楊堅が皇帝位についた後、王後の独孤氏を皇后に冊立し、王太子の楊勇を皇太子に冊立した。<sup>(41)</sup>ただし、独孤皇后と楊勇の本伝には、二人が王后・王太子にされたことを伝える記載がない。

義寧二年（六一八）隋唐禪讓の前に、李淵の礼遇が高ま

るにつれて、彼の家族の名号も前代のように変わった。これについて、『隋書』卷五・恭帝紀には、以下の記載がある。五月乙巳朔、詔唐王冕十有二旒、建天子旌旗、出警入蹕、金根車駕、備五時副車、置旄頭雲罕車、舞八佾、設鐘虡宮懸。王后・王子・王女爵命之号、一遵旧典。また、『旧唐書』卷一・高祖紀には、

五月乙巳、天子詔高祖冕十有二旒、建天子旌旗、出警入蹕。王后・王女爵命之号、一遵旧典。

とある。『隋書』に比べ、『旧唐書』に記載された礼遇は省略され、李淵の男子の名号については王子が省略されている。さらに、『新唐書』卷一・高祖紀では、「隋帝命唐王冕十有二旒、建天子旌旗、出警入蹕」という記載のみで、家族の名号についての記載が見られず、後の時代に編纂された史書ほど、隋唐禪讓の前における李淵の礼遇と妻子の名号に関する記述が簡略になっていく傾向が看取される。

さて、李淵が天子の礼遇を獲得した後、彼の妻子の名号は変更があったのだろうか。実は、李淵の嫡妻竇氏は、「太原原举兵」の前に死去している。しかし、義寧元年（六一七）十一月甲子に、李淵が唐王になって、同月五日後の己巳に隴西公の李建成を世子に立てた後、<sup>(42)</sup>同年十二月癸未に、竇氏は唐の王妃に追贈された。<sup>(43)</sup>さらに、武徳元年（六一八）六月己卯に、王妃竇氏は太穆皇后に追諡されており、同年



六月庚辰に、世子の建成を皇太子に立てている。<sup>(44)</sup> これを見る限りでは、この禪讓の前に、李淵の嫡妻と嫡嗣の名号は改変されていない。それでは、なぜ『隋書』と『旧唐書』に「王后・王女爵命之号、一遵旧典。」という記載があるのだろうか。それは禪讓の過程を記録する上で無視できない措置であるため、ここに特に記載されたと考えられる。一方、ここには世子・太子の記載がない。李淵が天子の礼遇を獲得してから隋恭帝が禪讓の詔書を発布するまでの時間が十三日あり、妻子の名号を変更することは十分できたはずである。ここに詳細な記載がないのは、のちに敗死した隠太子李建成に触れることを忌避したためだと考えられる。

以上の内容をまとめると、六朝隋唐の時に、帝王の実質を持ちながら未だ帝王の名号を有していない者が、皇帝位につく前に、これらの王后と太子の名号を彼らの妻子に与えていた。さらに、この名号は禪讓礼儀の中で重要な地位を占めていた。これらの名号はどのような名号であるか。次節では、王后・王太子号の沿革を詳述したい。

## 二 王后・王太子号の沿革

王后・王太子の名号については、各種の史籍に様々な解

釈が示されている。まず、王后号の沿革を分析しておこう。周の天子及び諸侯などの妻妾の名号について、伝世文獻の中で比較的完全で系統的な記録を保存する『礼記』曲礼下には、

天子之妃曰后、諸侯曰夫人、大夫曰孺人、士曰婦人、庶人曰妻。公・侯有夫人、有世婦、有妻、有妾。

とある。周の天子の嫡妻の名号は「后」であり、諸侯の嫡妻の名号は「夫人」であり、大夫・士・庶人の嫡妻にもほかの特定の名号がある。

建初四年（七九）十一月に、後漢の章帝は白虎觀で学者を集めて五經の異同について議論させて、經義を統一した。その結果を班固に編纂させた書物が『白虎通』<sup>(45)</sup>で、後漢政府と当時の学界において主流を占めた解釈を示す。「王后」について、『白虎通』には次のように見える。

天子之妃謂之后何。后者、君也。天子妃至尊、故謂后也。明配至尊、為海内小君、天下尊之、故繫王言之、曰「王后」也。『春秋伝』曰、「迎王后于紀。」<sup>(46)</sup>

これによると、「后」は天子の配偶者の専称であり、地位が極めて尊い。周の天子は「王」<sup>(47)</sup>という名号を用いたので周の天子の后は王后と称することができる。ただし、天子の嫡妻の名号としての「后」は、周代になってから初めて出現し、それ以前の記載は見られないという。<sup>(48)</sup>

秦朝の初めにあたり、最高統治者の名号は「王」から「皇帝」になり、この名号がこの後の帝政時代に通行した。これと異なり、最高統治者の嫡妻の名号は「后」という名号を踏襲し、「皇帝」に対応して、「皇后」と称した。<sup>(49)</sup>最高統治者の正妻の名号の沿革について、『初学記』巻一〇・中宮部・皇后第一によると、

周則天子立后、正嫡曰王后。秦称皇帝、正嫡曰皇后。漢因之、帝祖母称太皇太后、母称皇太后。魏晉之後、母后之号、並遵秦漢、其余嬪御、代有沿革矣。

とある。ここでは、周の天子の正妻と後世の皇帝の母親の名号について述べられている。王后は周王の嫡妻の名号である。秦始皇帝は皇帝の名号を採用した際に、彼の嫡妻を王后ではなく、代わりに皇后と称した。漢王朝は秦朝の制度を継承し、皇帝の嫡妻の名号も秦と同じであった。その後の王朝は全てこの名号を踏襲した、という。要するに、周代から天子の正妻は「后」を用い、後世の君主の正妻は全てこの名号を踏襲した。なお帝政時代に入っても、王后の名号は廃止されていないが、皇帝の嫡妻についてはこの名号を使用しなくなったのである。

春秋戦国時代、周王室が衰微し、各諸侯は「王」を僭称した。<sup>(50)</sup>そのため、春秋戦国時代に、諸王の正妻が王后と称する記載がよく見られる。秦王朝が滅亡した後に、項羽は

「西楚霸王」と称し、六国の貴族・有功の將軍・秦朝から投降將軍などに王爵を分封した。<sup>(51)</sup>この時、諸侯王の嫡妻も王后の名号を使用している。これは春秋戦国時代の風潮を踏襲したものであり、その淵源は周代の制度である。

前漢に入っても、諸侯王の正妻は以前の王后号をそのまま使用したが、文帝期に賈誼は「天子親、号云太后、諸侯親、号云太后。天子妃、号曰后、諸侯妃、号曰后。然則、諸侯何損而天子何加焉。妻既已同、則夫何以異。」と指摘した。<sup>(52)</sup>前漢の景帝・武帝は諸侯王を抑制したが、それでも彼らの嫡妻はなお王后の名号を使用した。出土した前漢の封泥や銅器の中に、太后・王后の記載がよく見られる。<sup>(53)</sup>さらに前漢の末期、漢平帝の母親もまた王后の名号を使用した。<sup>(54)</sup>つまり、前漢王朝の時、諸侯王の正妻は王后の名号を使用し続けた。

新朝を建国した際、王莽は「天無二日、土無二王、百王不易之道也。漢氏諸侯或称王、至於四夷亦如之、違於古典、繆於一統。」と考えて、前漢の諸侯王の王号を公号に改めて、四夷の王号を侯号に改めた。<sup>(55)</sup>それ故に、王莽の時期には王后という名号は見られない。そして後漢に入って、諸侯王の正妻の名号に王后を使わず、王妃の名号を使用し始めた。これは後漢政府の「后」という名号に対する認識と密接な関係がある。上引『白虎通』によると、「后」は天子の嫡

妻の名号である。そして、後漢政府は諸侯王の正妻が王后の名号を使用することを禁止した。諸侯王の母と妻に対して、後漢政府は以下のように明確に規定している。

『統漢書』百官志五には胡広語を引いて、

後漢妾数無限別、乃制設正適、曰妃、取小夫人不得過四十人。

とあり、『統漢書』輿服志上には、

大貴人・貴人・公主・王妃・封君油画軒車。

とあり、『統漢書』百官志三には、

諸公主及王太妃等有疾苦、則使〔小黃門〕問之。

とある。また、熹平四年（一七五）、後漢の靈帝は質帝の母親の陳夫人を渤海孝王の王妃に拝した。<sup>(58)</sup>要するに、後漢時期、制度上においても実質的にも諸侯王の正妻は王妃と称したのである。

次に、天子嫡子の名号について、『白虎通』には、

『韓詩内伝』曰、「諸侯世子三年喪畢、上受爵命于天子。

所以名之為世子何。言欲其世世不絶也。」何以知天子

之子亦称世子也。『春秋』曰、「公会王世子于首止。」

或曰、天子之子称太子。『尚書伝』曰、「太子発升王舟。」

『中候』曰、「廢考、立発為太子。」明文王時称太子也。

とある。天子の嫡子は、周文王の時に太子と称し、春秋時代に太子・世子の二つの名号を使用したというが、諸侯の

嫡子が太子という名号を使用することができるかどうかについては言及しない。

その点に言及するのは、『初学記』の次の記述である。

『韓詩外伝』曰、「五帝官天下、三王家天下。家以伝子、

官以伝賢。」故自唐虞已上、経伝無太子称号。夏殷之王、

雖則伝嗣、其文略矣。至周始見文王世子之制。『白虎通』

曰、「何以知天子之子称世子。『春秋伝』曰、「王世子

会于首止是也。』何以知天子之子称太子。『尚書』曰、「太

子発升于舟是也。』或云諸侯之子称世子。則『春秋伝』

云、「晋有太子申生、鄭有太子華、齊有太子光。」由是

觀之、周制、太子・世子、亦不定也。漢制、天子称皇

帝、其嫡嗣称皇太子、諸侯王之嫡称世子。後代咸因

之。<sup>(60)</sup>

これによれば、周代には天子と諸侯の嫡嗣はすべて太子や世子と称し、漢代に、天子の嫡子は皇太子と称し、諸侯王の嫡子は世子と称するようになり、後世の王朝は全てこの名号を踏襲した、という。しかし、『史記』によれば、秦始皇帝の嫡子も太子と称し、また、前漢初期の諸侯王の嫡嗣は皇帝の嫡嗣と同じく太子の名号を使用した。<sup>(62)</sup>そして、列侯の嫡子は世子や太子と称している。<sup>(63)</sup>王莽の時に、諸侯の嫡子は世子と称し、後漢に入って、列侯の嫡嗣は太子ではなく、もっぱら世子と称するようになった。<sup>(66)</sup>しかしなが

ら、後漢時期の諸侯王の嫡子はそのまま太子号を使用した。例えば、濟南安王の劉康の嫡嗣の劉錯は太子と称した。<sup>(67)</sup>後漢の和帝の時に、下邳恵王の劉衍の嫡嗣も太子と称している。<sup>(68)</sup>皇族等諸王の嫡嗣を太子ではなく、世子と称するようになるのは、曹魏以後のことである。

以上をまとめると、理想的な時代とされる王政の周代には、「后」と「太子」は天子の嫡妻と嫡子の名号であり、秦始皇帝以後、帝政時代に入るとこれらの名号は皇帝の嫡妻と嫡嗣の専称になった。ただし、前漢の時には、それほど厳しい制限がなく、諸侯王の嫡妻と嫡嗣もこの名号を使用した。そして、後漢の時に、「后」という名号の使用に對して、厳格な制限が生じたが、諸侯王の嫡嗣はなお「太子」の名号を称することができた。前述のように、その後の六朝隋唐時代、王朝禪讓の前に権臣の王国の中で王妃・王世子が王后・王太子に変えられる現象が現れた。なぜ王后・王太子という名号を採用したのか、そのことには如何なる意味があるのか。次節では、これらの名号と禪讓政治との關係を検討したい。

### 三 王后・王太子号と禪讓政治

上古における禪讓の起源や変遷について、これまで多様

な研究成果が蓄積されてきた。<sup>(69)</sup>帝政時代に入って、王莽は初めて禪讓の実践を試みた。<sup>(70)</sup>ただし、その禪讓において、漢帝が王莽に王爵を授与することはなく、彼の嫡妻や嫡嗣の名号には前述のような変化がなかった。そこで、次の漢魏禪讓において、漢獻帝から曹操の嫡妻や嫡嗣に授与した名号にあらためて注目したい。

第一節で述べたように、曹操は魏王位につき、次第に天子と同格の種々の礼遇<sup>(71)</sup>を獲得した後、礼遇と爵位をそれ以上に追加することができなくなったため、彼の嫡子・嫡妻の名号が太子・王后に変更された。曹操がこの礼遇と名号を創出し、司馬昭がこれを継承し完全なものとしたのであった。そして、これは後の王朝交替のモデルとなり、後世の権臣もこの名号を採用する。禪讓の前に、皇帝は彼らの嫡嗣と嫡妻にこの名号を同時に授与するとともに、これらの権臣に皇帝の礼遇を与えている。<sup>(72)</sup>これに對して、曹操の時には、これらの礼遇と名号をすべて与えるのにほぼ六年間を費やした。<sup>(73)</sup>とは言え、後世の禪讓の過程に見られる天子の礼遇と王后・王太子という名号の創建者は曹操だと言える。

なぜ曹操は右のような礼遇特に名号を創始しようとしたのか。後漢時期に、儒学が繁栄し、人々は君臣父子の秩序を遵守したため、後漢が減じる寸前でさえ人々は漢王朝を

助けることを自分の使命にしたと評価されている。<sup>(75)</sup>その上、  
 両漢王朝が四百年も続いたため、人々から思慕されたとも  
 いわれる。<sup>(76)</sup>これらの要因によって士大夫の後漢王朝に対す  
 る熱烈な支持を生じさせた。<sup>(77)</sup>だからこそ、曹操は漢献帝に  
 取って代わる野望と実力があつたにもかかわらず、このよ  
 うな状況に鑑みて軽率に行動することができず、漢魏の王  
 朝交替は長い年月を要したのだろう。彼は比較的平和な方  
 式を採用し、次第に自分の地位を高め、最後に皇帝と同格  
 の礼遇を得て、その後、漢魏王朝の交替を実現するという  
 考えだったのではないだろうか。とすれば、上述の礼遇や  
 名号はこのような背景の下で創始されたものであつた。

こうした儒学が繁栄した時代に、曹操は袁紹ほどの優秀  
 な家学の伝統を継承しなかったが、彼は「明古学」と見な  
 された。そのため、彼は従妹婿の宋奇が誅殺された際に連  
 坐して免官された後、再び議郎に任命されることができ  
 た。<sup>(78)</sup>ここから、曹操も高い儒学の素養を持っていたと考え  
 られる。田餘慶氏は曹操と何夔・陳群の関係を考察し、晩  
 年の曹操の「意識形態」(イデオロギー)が儒家へ回帰す  
 る傾向にあり、これは彼が全ての政敵を消滅させた後、残  
 すは皇冠をつまみ取るだけの時に、必然的に現れた態度だ  
 と述べる。<sup>(79)</sup>この儒家への回帰は魏公・魏王への進号を正当  
 化するために曹操が董昭の提出した封建論という古制を利

用する時に現れた。<sup>(80)</sup>すなわち、曹氏父子は周代の再現とし  
 て、儒家經典中の理想的な聖王に倣おうと考えていた。具  
 体的には以下の施策を指摘できる。

第一に、曹操は自らを周文王の物語になぞらえた。建安  
 二十三年(二一八)九月、曹操は長安に行き、蜀を征服し  
 ようとした。この時劉廙は曹操が周文王に倣って德行を用  
 いて周辺を宣撫すれば、戦いに奔走する必要がないと上奏  
 した。それに応じて、曹操は「今欲使吾坐行西伯之德、恐  
 非其人也」と答えた。<sup>(81)</sup>建安二十四年(二一九)十月、孫權・  
 夏侯惇・陳群・桓階らが曹操に漢朝に取って代わることを  
 すすめると、彼は「若天命在吾、吾為周文王矣」と答え、  
 一生「漢臣」となった。<sup>(82)</sup>これを見ると、曹操は漢朝に取っ  
 て代わる願望があつたが、自身でこれを成し遂げることな  
 く、自分の息子の曹丕に完遂させた。これは周文王の物語  
 になぞらえることができる。<sup>(83)</sup>

第二に、曹操の祖先の系譜を周王室に遡らせた。曹魏の  
 祖先としては、四人の人物が挙げられていた。即ち漢相国  
 の曹參<sup>(84)</sup>・曹叔振鐸<sup>(85)</sup>・顓頊<sup>(86)</sup>・舜<sup>(86)</sup>である。『三国志』卷一四・  
 蔣濟伝の裴松之注には以下のような記載がある。

魏武作『家伝』、自云曹叔振鐸之後。故陳思王作『武  
 帝誄』曰、「於穆武皇、曹稷胤周。」

『世本』によると、曹叔振鐸は周文王の息子である。<sup>(87)</sup>そして、

曹操・曹植は自分が周王室の後裔であると標榜していた。さて、曹魏は自分の祖先を数度変更したが、これは漢魏王朝の交替と密接な関係がある。朱子彦氏の研究によると、曹参・曹叔振鐸の後裔であることを標榜したのは身分を高めるためであるのに対して、顓頊と舜の後裔を標榜したのは禪讓政治に必要であったためという。私見では、曹操が自分の祖先を周王室に遡らせたことには、身分を高めるほかに、周王室の後裔を標榜し、聖王になろうとする思惑があったと考えられる。

第三に、祖父を「太王」と追尊した。曹丕は魏王について後の延康元年（二二〇）五月に、彼の祖父曹嵩を太王と追尊している。太王は周文王の祖父古公亶父の尊号である。周の王業の創建は彼から始まると見なされていた。<sup>(90)</sup>それ故、周の武王は周を立てた後、古公亶父を太王に追封した。経学が繁栄した後漢時代に、士人たちは儒学の典故に通じており、「太王」の地位や意義の重要性をよく分かっていた。ただし、曹嵩の曹魏における地位と古公亶父の周代における地位は同一に論じることができない。さて、曹嵩はこのような名号を獲得できるほど、曹魏の建国に貢献していない。しかし、漢魏王朝交替という背景と合わせて考えると、彼が太王に追尊されたことは曹魏が漢王朝に取って代わることを意味する。この点については、当時の尚書令の桓階

たちの上奏文から、太王という名号が持つ深い政治的意味を見出すことができる。<sup>(91)</sup>

さて、曹操の王爵が有する性質については多くの論説がある。曹操の魏公国・魏王国は秦漢以後の名義上の諸侯国とは性質を異にし、封建領主の実を備えたものである。<sup>(92)</sup>この時、漢と魏の関係は以前の君臣主従関係ではなく、魏国はすでに独立王国になっていた。従って、曹操の王爵は漢制の二十等爵ではなく、五等爵制を基礎として建てられた王爵である。<sup>(93)</sup>曹操が享受した殊礼から見ると、彼が得た魏公は実質的には諸侯王に相当し、魏王は漢の天子に比して遜色ない權威を備えていた。<sup>(94)</sup>また、『三国志』卷一四・董昭伝には、

昭建議、「宜修古建封五等。」太祖曰、「建設五等者、聖人也、又非人臣所制、吾何以堪之。」昭曰、「自古以來、人臣匡世、未有今日之功。有今日之功、未有久処人臣之勢者也。」（中略）後太祖遂受魏公・魏王之号、皆昭所創。

とある。これによると、董昭が建封五等<sup>(95)</sup>を提出した時、曹操はこれが人臣によって作られたものではなく、聖人が作ったものだとして述べた。それに対して董昭は曹操の功績が非常に大きいものであって、永く人臣に居るものではないと答えている。その後、董昭の意見を採用し、曹操は魏公・



魏王になった。このことから、曹操の魏公、特に魏王は既に単なる「人臣」ではなく、「聖人」(帝王／天子)の地位と見なされていたことを窺える。最近、『献帝起居注』を考察した徐冲氏の考論に拠れば、この書の記述は建安二十一年(二一六)二月壬申で終わっており、漢魏禪代のプロセスを最後まで書く意図が見られず、漢献帝の皇帝権力がここに至って遂に消滅したと考えられるという。<sup>(96)</sup>そして、漢献帝の皇帝権力が消滅したとされる二月の後の五月に、曹操は魏王になり、皇帝の権力を代行するようになった。要するに、曹操の魏王国は禪譲の過程で一時的に設けられた独立王国であったが、彼に与えられた魏王という名号は封建制の中の最高統治者の「王」、即ち周代における「天子」と意味が同じである。その上、さらに曹操は天子の種々の礼遇を受け、妻子の名号も「天子」と等しくしていた。

以上の経緯からすれば、曹操の礼遇と妻子の名号を高めた後、各種の激しい反対が湧き起こったのは当然のことであつた。建安二十二年(二一七)、曹操が天子と同格の礼遇を得て、嫡子が太子に立てられた。その次年正月、許昌で金禪らの叛乱が発生した。<sup>(97)</sup>また、建安二十四年(二一九)七月、曹操の夫人卞氏が王后に立てられ、九月、鄴都以魏諷の叛乱が発生した。<sup>(98)</sup>柳春新氏はこれらの叛乱特に魏諷の乱が曹操の称帝計画を乱したと見なしている。<sup>(99)</sup>もしこれ

らの叛乱が起きなければ、曹操は皇帝位についていた可能性が非常に高い。上述の状況を考慮し、魏諷の乱を平定した同年の十月に孫権が曹操に天命があると説き、曹操に皇帝即位を勧めた時、曹操は「是兄欲踞吾著炉火上邪。」と答え、ついに皇帝と称さなかった。<sup>(100)</sup>

第二節で述べたように、「后」・「太子」は周代の天子の嫡妻と嫡子の名号である。この点を踏まえると、漢魏王朝交替の際に曹操がこの名号を使用したことは、周代の制度になぞらえることで、周制を隠れ衰としつつ、「篡漢」を進めようとしていた意図の表れであろう。つまり、曹操の魏王とは周代の「王」即ち「天子」と同じ意味である。この王爵とは、儒家に高く評価された周代の封建制の中の「王」である。禪譲の時に、「王」から「皇帝」に変わることは秦王嬴政が天下統一を成し遂げ、最高統治者の名号が「王」から「皇帝」に変わることは似ている。曹氏父子が苦心して築き上げた漢魏の禪譲は、中世王朝の交替の禪譲モデルとなり、後世に深い影響を与えた。

#### おわりに

「后」・「太子」は王政の周代の天子の嫡妻と嫡子の名号である。帝政時代に入り、最高統治者の名号は王から皇帝

に変わり、皇帝の妻子は以上の名号を用いながらも、より尊貴であることを示すためにその前に「皇」を加えた。諸侯王の妻子は、前漢初期、「后」「太子」名号をそのまま用いたが、後漢の時この名号を使用することに制限が加えられた。漢魏王朝の交替の過程で、王朝交替の理念のために曹操はこれらの名号を初めて使い、後世の王朝がこれを踏襲した。

六朝隋唐で、禪讓の前における権臣らの礼遇は、皇帝とほぼ同等に達し、これ以上爵位を追加することができなくなった時に、彼らは自分の嫡妻と嫡子の名号を変えた。その後、王朝の交替に伴って、権臣らの名号は王から皇帝になるが、彼らの嫡妻と嫡子の名号は二つの段階を経る。まず、王妃・王世子から王后・王太子になる。次に王后・王太子から皇后・皇太子になる。もちろん、特殊な原因によって、こうした過程を経ない場合もあったが、この名号の変更は既に禪讓儀式の中で、重要不可欠な地位を占めるようになったのである。また、この名号の変更は、禪讓儀式中に限定されず、禪讓以外の方式によって立った政権の創建過程において、これらの創始者及び妻子の名号にも上述の変化を生じさせた。つまり、六朝隋唐においては、王后・王太子という名号は各政権に対して深い影響があり、漢族政権及び胡族政権の中に流行していたと言えるよう。

## 注

- (1) 『廿二史劄記』卷七・禪代条に拠る。また、楊永俊『禪讓政治研究——王莽禪漢及其心法伝替』（学苑出版社、二〇〇五）第三章「王莽禪漢——対篡逆・居摂政治の突破」、一一一～一二二頁。朱子彦『漢魏禪代与三国政治』（東方出版中心、二〇一三）第一章「王朝鼎革的主流形態……以漢魏禪代为中心」、三五頁注③等も参照した。ちなみに唐と後梁、後周と北宋の王朝交替も「禪讓」の方式により完成した。しかし、礼制特に名号の面から考察すれば、この二つの「禪讓」と前代王朝の事例とは明らかに異なる。唐梁・周末の事例では礼制面の規定は多く省略され、しかも王朝交替の時間も更に短くなり、ただ「禪讓」の虚名が残った状態であった。この変化について、宮川尚志氏はこれと貴族主義風潮の転換や貴族勢力の衰退などに密接な関係があると指摘した（『禪讓による王朝革命の特質』、『東方学』第一一輯、一九五五、五〇～五八頁）。故に、本稿では漢魏禪讓から隋唐禪讓までの歴史を考察対象とし、唐と後梁、後周と北宋間の禪讓に言及しない。
- (2) 周国林「魏晋南北朝禪讓模式及其政治文化背景」（『社会科学』一九九三年第二期）三八頁。
- (3) 魏国太子の子冊立は形式的にせよ漢献帝の詔が必要だったのか、それとも、漢献帝とは関係なく魏国自ら決定できたのか、という問題について史籍の記載は異なっている。例えば、上述『三国志』卷一・武帝紀の他に『資治通鑑』卷六八・献帝建安二十二年十月条には、「魏以五官中郎将丕

為太子」とある。

- (4) 王后の冊立と上述の太子の冊立状況は同じである。『三  
国志』卷五・武宣下皇后伝には、王后を冊立する策文「夫  
人下氏、撫養諸子、有母儀之德。今進位王后、太子諸侯陪  
位、群卿上寿、減国内死罪一等。」とある。『資治通鑑』卷  
六八・献帝建安二十四年七月条には、「詔以魏王操夫人卞  
氏為王后」とある。これに関して、盧弼の『三国志集解』  
卷五・武宣下皇后伝には、「立后策文、当為魏国之策命、  
非漢天子之詔也。策文減国内死罪一等、減魏国国内死罪也。  
『通鑑』誤。」とある。

- (5) 『三国志』卷三三・後主伝。同書卷三四・先主穆皇后伝。  
(6) 『三国志』卷二・文帝紀。曹丕が孫権を呉王に冊封し、  
九錫を与えた理由については、朱子彦「九錫制度与漢魏禪  
代——兼論九錫在三国時期的特殊功能」(『人文雜誌』二〇  
〇七年第一期)一三七—一三九頁を参照。

- (7) 『三国志』卷四七・呉主伝。  
(8) 『三国志』卷四七・呉主伝。  
(9) 『三国志』卷五〇・呉主権徐夫人伝、同書同卷呉主権歩  
夫人伝。

- (10) 『三国志』卷四・三少帝紀。  
(11) 『晋書』卷六・元帝紀。  
(12) 『晋書』卷六・元帝紀。  
(13) 『晋書』卷三二・元敬虞皇后伝。  
(14) 『晋書』卷六・元帝紀。  
(15) 『晋書』卷六・元帝紀。

- (16) 『晋書』卷一〇四・石勒載記上。その後、咸和五年(三  
三〇)石勒が趙天王についた際に、その夫人・世子は王后・  
太子となった(同書卷一〇五・石勒載記下)。これは、王  
ではなく「天王」の場合だが、禪讓直前の王の場合と同様  
の事例と見なすことができる。「天王」——王后・太子の例は、  
馮跋(同書卷一二五・馮跋載記)、赫連勃勃(同書卷一三〇・  
赫連勃勃載記)の事例にも見られる。

- (17) 『晋書』卷一〇五・石勒載記下。  
(18) 『晋書』卷一〇九・慕容皝載記。  
(19) 『晋書』卷一二六・苻堅傳檀載記。  
(20) 『宋書』卷四一・孝穆趙皇后伝。

- (21) 『宋書』卷四一・孝懿蕭皇后伝。ただし、これと「武帝  
紀中」の記載には異なるところがある。『宋書』卷二・武  
帝紀中には、「(義熙十四年六月)詔崇豫章公太夫人為宋公  
太妃。」とある。

- (22) 『宋書』卷三・武帝紀下。また、『宋書』卷四一・孝懿蕭  
皇后伝には、「義熙七年、拝豫章公太夫人。高祖為宋王、  
又加太妃之号。(中略)在外凡五年、后常留東府。高祖踐阼、  
有司奏曰、『(中略)伏惟太妃母儀之德、(中略)臣等請上  
宋王太后号皇太后。』故有司奏猶称太妃也。」とある。ただ  
し、『宋本冊府元龜』卷一八九・閏位部・尊親条には、「宋  
高祖永初元年六月即位、尊王太后蕭氏為皇太后。有司奏曰、  
『(中略)伏惟太后母儀之德、(中略)臣等請上宋王太后号  
曰皇太后。』」とある。これによると、『宋書』の太妃は太  
后のほずである。劉裕が皇帝位につき、蕭氏が王太后から

皇太后に改変される前に、有司の上奏文はなお「王」太后と称した。

- (23) 『宋書』卷四一・武敬臧皇后伝。
- (24) 『宋書』卷四・少帝紀。
- (25) 『宋書』卷三・武帝紀下。
- (26) 『南齊書』卷三・武帝紀。
- (27) 『南齊書』卷二〇・高昭劉皇后伝。
- (28) 『南齊書』卷二〇・高昭劉皇后伝。
- (29) 『宋書』卷一〇・順帝紀、『南齊書』卷一・高帝紀上。
- (30) 『南齊書』卷八・和帝紀には「甲午」とあり、『梁書』卷一・武帝紀上と『南史』卷六・梁本紀上には、「丙午」とある。『南齊書』(中華書局修訂本、二〇一七) 卷八・和帝紀の第一五條校勘記によると、「丙午」のはずであるという。
- (31) 『梁書』卷七・高祖鄒皇后伝。
- (32) 『南齊書』卷八・和帝紀。
- (33) 『梁書』卷八・昭明太子伝。
- (34) 『陳書』卷一・高祖紀上。
- (35) 『陳書』卷二・高祖紀下。
- (36) 『陳書』卷七・高祖章皇后伝。
- (37) 『北齊書』卷五・廢帝紀。
- (38) 『魏書』卷一二・孝靜帝紀。
- (39) 『北齊書』卷四・文宣帝紀。
- (40) 『隋書』卷一・高祖紀上。『隋書』では唐太宗の諱を避けるため世子を長子と書いた。ただし、『北史』卷一一・隋本紀上では、直接「世子」と記している。

(41) 『隋書』卷一・高祖紀上。

- (42) 李建成を世子に封じた時のことについては、『大唐創業起居注』・『隋書』・『旧唐書』・『新唐書』・『資治通鑑』の記載に相違がみられる。『大唐創業起居注』卷三は「(十一月)己卯、以隴西公為唐王世子」とある。『隋書』卷五・恭帝紀は「(十一月)己巳、以唐王子隴西公建成為唐国世子」とある。また、『旧唐書』卷一・高祖紀は「(十一月)甲子、隋帝詔加高祖假黃鉞、使持節、大都督内外諸軍事、大丞相、進封唐王、総録万機。以武德殿為丞相府、改教為令。以隴西公建成為唐国世子。」とある。『新唐書』卷一・高祖紀は「十二月癸未、隋帝贈唐襄公為景王。仁公為元王。夫人竇氏為唐国妃、諡曰穆。以建成為唐国世子。」とある。『資治通鑑』卷一八四・恭帝義寧元年十一月条は「己巳、以李建成為唐世子」とある。本稿では『隋書』と『資治通鑑』の記載に従った。

(43) 『新唐書』卷一・高祖紀。

(44) 『旧唐書』卷一・高祖紀。

- (45) 『後漢書』卷三・章帝紀。また朱漢民「『白虎通義』…帝国政典和儒家經典的結合」(『北京大学学报(哲学社会科学版)』二〇一七年第四期) 一五—二三頁を参照。

(46) 『白虎通』卷一〇・嫁娶・王后夫人条。

- (47) 封建制において、最高統治者の天子は王と称した。ただし、西周時期に、周王朝の封建制以外において、小さい邦国の邦君が王と称する例がある。これらは大体蛮夷戎狄の国であり、彼らは王と称する旧俗を踏襲した。これらにつ

いては趙政娘「矢王蠶蓋跋——評王国維『古諸侯称王說』」  
 (陝西省考古研究所等編『古文字研究』第一三輯、一九八〇  
 一七九—一八〇頁、王震中「中国王権の誕生——兼論王権  
 与夏商西周複合制国家結構之關係」(『中国社会科学』二〇  
 一六年第六期)一九四—一九五頁を参照。

(48) 『日知録』卷二四・后条。

(49) 『漢書』卷九七上・外戚伝上。

(50) 呂思勉『呂著中国通史』(華東師範大学出版社、一九九二、  
 初出は一九四五)三三一—三三三頁。前掲「中国王権の誕  
 生——兼論王権与夏商西周複合制国家結構之關係」、一九  
 六頁。

(51) 『史記』卷七・項羽本紀。

(52) 例えば、趙王の張敖の嫡妻は王后と称した。『史記』卷  
 八九・張耳陳餘列伝。

(53) 『新書』卷一・等齊。

(54) 吳榮曾『西漢王國官制考実』(『北京大学学报』(哲学社会  
 科学版)一九九〇年第三期)一二二頁。

(55) 『漢書』卷九七下・中山衛姬伝。

(56) 『漢書』卷九九中・王莽伝中。

(57) 後漢の初期、「王太后」と称する例は一つだけあるが、「王  
 后」と称する例は見られない。『後漢書』卷一〇上・光武  
 郭皇后紀には、「后(郭皇后)以寵稍衰、数懷怨懟。十七年、  
 遂廢為中山王太后、進后中子右翊公輔為中山王、以常山郡  
 益中山国。(中略)二十年、中山王輔復徙封沛王、后為沛  
 太后。」とある。なお、『後漢書』卷一下・光武帝紀下・建

武十七年冬十月辛巳条にも関連する記事がある。

(58) 『後漢書』卷八・靈帝紀。

(59) 『白虎通』卷一・爵・諸侯襲爵条。

(60) 『初学記』卷一〇・儲宮部・皇太子第三。

(61) 『史記』卷六・秦始皇本紀。

(62) 『史記』卷一〇六・吳王濞列伝。王先謙と瀧川龜太郎(瀧  
 川資言)は周寿昌語を引いて、「漢制、王及列侯長子皆称  
 太子、王母称太后、不必天子也」という。『漢書補注』卷四・  
 文帝紀。『史記会注考証』卷一〇・孝文本紀。

(63) 『史記』卷四九・外戚世家には、「衛子夫立為皇后、后弟  
 衛青字仲卿、以大將軍封為長平侯。四子、長子伉為侯世子、  
 侯世子常侍中、貴幸。」とある。

(64) 『史記』卷一〇・孝文本紀には、「其令列侯之国、為吏及  
 詔所止者、遣太子。」とある。

(65) 『漢書』卷九九中・王莽伝中。

(66) 『後漢書』卷一〇下・皇后紀下。

(67) 『後漢書』卷四二・光武十王伝には、「錯為太子時、愛康  
 鼓吹妓女宋閭、使医張尊招之不得、錯怒、自以劍刺殺尊。  
 国相举奏、有詔勿案。」とある。

(68) 『後漢書』卷五〇・孝明八王伝には、「衍後病荒忽、而太  
 子印有罪廢、諸姬争欲立子為嗣、連上書相告言。和帝憐之、  
 使彭城靖王恭至下邳正其嫡庶、立子成為太子。〔注〕『東觀  
 記』載賜恭詔曰、『(中略)前太子印頑凶失道、陷於大辟、  
 是後諸子更相誣告、迄今適嗣未知所定、朕甚傷之。』(中略)  
 太子国之儲嗣、可不慎歟。王其差次下邳諸子可為太子者上

名、将及景風拜授印綬焉。」とある。

- (69) 鄭傑文「禪讓學說的歴史演化及其原因」(『中国文化研究』二〇〇二年春之卷) 二六―二七頁。彭裕商「禪讓說源流及学派興衰——以竹書《唐虞之道》・『子羔』・『谷城氏』為中心」(『歴史研究』二〇〇九年第三期) 四―一五頁。

- (70) 王莽代漢については禪讓と篡奪のいずれに見えなくとも、学界で多様な見解がある。楊永俊「王莽禪漢・復古建制中創封建王朝更替新統」(『求索』二〇〇六年第三期、二二頁)を参照。王莽代漢が後世王朝に与えた影響について、楊永俊氏は王莽代漢が後世の魏晉南北朝隋唐五代宋の王朝交替政治に重大な影響を与えたと考える。前掲楊氏の文章を参照。松浦千春氏「王莽禪讓考」(『一関工業高等専門学校研究紀要』第四二号、二〇〇八、二九頁)は王莽禪讓と漢魏禪讓とは多くの違いがあり、後世の禪讓儀礼は全て漢魏禪讓に倣ったと考える。徐冲氏「『禪讓』与『起元』：魏晉南北朝的王朝更替与国史書写」(『歴史研究』二〇一〇年第三期、一〇九頁)は王莽代漢が特殊なモデルを採用し、後世における王朝交替のモデルとならず、魏・晋王朝が中国古代において最初に禪讓モデルによって完成した王朝交替であったと考える。本稿は、主に禪讓儀礼中の王后・王太子号に対する考察であるが、これは曹操が創建し、司馬昭が継承して完全なものとしたものであって、王莽代漢とは関係がないと考えている。

- (71) 建安十五年(二一〇)、曹操は袁術が九江で皇帝を僭称し、衣被の制を全て天子と同格にしたことを非難した。『三国

志』卷一・武帝紀注引『魏武故事』所載の十二月己亥令には、「(中略)袁術僭号于九江、下皆称臣、名門曰建号門、衣被皆为天子之制、而婦孺争為皇后。」とある。しかし曹操の場合では、この時に曹操が衣被の制にとどまらず、全て天子と同格の礼遇を獲得している。

- (72) 例えば、「樂舞八佾」(曹操が魏公に冊封された時は六佾之舞)、「置旄頭、宮殿設鐘虓」、「天子命王設天子旌旗、出入称警蹕」、「冕十有二旒、乘金根車、駕六馬、設五時副車」などである。

- (73) 第一節で言及した漢魏の禪讓は、建安十八年(二一三)五月から建安二十四年(二一九)秋七月までの時間である。
- (74) 『三国志』卷五・后妃伝には、「太祖建国、始命王后。」とある。

- (75) 『後漢書』卷七九下・儒林伝下の「論曰」には、「自光武中年以後、干戈稍戢、專事經学、自是其風世篤焉。(中略)故人識君臣父子之綱、家知違邪歸正之路。」とある。『資治通鑑』卷六八・獻帝建安二十四年十一月臣光曰条には、「自三代既亡、風化之美、未有若東漢之盛者也。及孝和以降、貴戚擅權、嬖倖用事、賞罰無章、賄賂公行、賢愚渾殽、是非顛倒、可謂乱矣。然猶綿綿不至於亡者、上則有公卿、大夫袁安・楊震・李固・杜喬・陳蕃・李膺之徒面引廷争、用公義以扶其危、下則有布衣之士符融・郭泰・范滂・許劭之流、立私論以救其敗、是以政治雖濁而風俗不衰、至有舐冒斧鉞、僵僕於前、而忠義奮發、繼起於後、踵踵就戮、視死如歸。夫豈特数子之賢哉。亦光武・明・章之遺化也。」と



ある。

- (76) 『宋書』卷三・武帝紀下の「史臣曰」には、「漢氏載祀四百、比祚隆周、雖復四海橫潰、而民繫劉氏、慄慄黔首、未有遷奉之心。魏武直以兵威服衆、故能坐移天曆、鼎運雖改、而民未忘漢。」とある。

- (77) 『後漢書』卷七九下・儒林伝下の「論曰」には、「自桓・靈之間、君道秕僻、朝綱日陵、国隙屢啓、自中智以下、靡不審其崩離。而權彊之臣、息其闖盜之謀、豪俊之夫、屈於鄙生之議者、人誦先王言也、下畏逆順執也（中略）跡衰敝之所由致、而能多歷年所者、斯豈非学之效乎。故先師垂典文、褒励学者之功、篤矣切矣。」とある。『資治通鑑』卷六八・献帝建安二十四年十一月臣光曰条には、「以魏武之暴戾強仇、加有大功於天下、其蓄無君之心久矣、乃至没身不敢廢漢而自立、豈其志之不欲哉。猶畏名義而自抑也。」とある。田餘慶「孫呉建国的道路——論孫呉政權的江東化」(『秦漢魏晉史探微(重訂本)』所収、中華書局、二〇一一、初出は一九九二)二九三頁。

- (78) 『三国志』卷一・武帝紀注引『魏書』。
- (79) 田餘慶「曹袁之爭与世家大族」(前掲『秦漢魏晉史探微(重訂本)』所収、初出は一九七四)一五九～一六一頁。
- (80) 『三国志』卷一四・董昭伝。
- (81) 『三国志』卷二一・劉廙伝。
- (82) 『三国志』卷一・武帝紀注引『魏略』・『魏氏春秋』。『資治通鑑』卷六八・献帝建安二十四年十一月条。
- (83) 前掲「曹袁之爭与世家大族」、一五七頁。

- (84) 『三国志』卷一・武帝紀。

- (85) 『三国志』卷二・文帝紀引『献帝伝』。

- (86) 『三国志』卷三・明帝紀引『魏書』所載明帝詔。

- (87) 『世本』諸侯世本・曹国条。

- (88) 前掲「漢魏禪代与三国政治」第一章「王朝鼎革的主流形態・以漢魏禪代为中心」、五六頁。

- (89) 『三国志』卷二・文帝紀。

- (90) 『毛詩正義』卷二〇(二〇之二)には、「后稷之孫、実維大王。居岐之陽、実始翦商。」(大音泰。後大王、大平皆同。)とある。李忠林「周人翦商史実考略」(『北大史学』一二、北京大学出版社、二〇〇七)一～一二頁も参照。

- (91) 『通典』卷七二・天子追尊祖考妣上尊号同条には、「魏文帝即王位、尚書令桓階等奏、『臣聞尊祖敬宗、古之大義。故六代之君、未嘗不追崇始祖、顯彰所出。先王応期拔乱、啓魏大業、然禰廟未有異号、非崇孝敬示無窮之義也。太尉公侯、宜有尊号、所以表功崇德免事頭名者也。故『易』言乾坤、皆曰大德、言大人与天地合。臣等以為、太尉公侯、誕育聖哲、以濟群品、可謂資始、其功德之号、莫過於太王。今迎神主、宜乘王車、又宜先遣使者上諡号为太王。』於是漢帝追諡為太王。及受禪、追尊太王為太皇帝、考武王為武皇帝、尊王太后為皇太后。」とある。『通典』の原文は錯乱があり、戴衛紅氏「魏晉南北朝帝王諡法研究(下)」(『許昌学院学报』二〇一六第三期)一一～一二頁の考論に従って改めた。

- (92) 前掲「禪讓による王朝革命の特質」には、「中国が封建

制社会であつたという学者も政治的封建の階層組織はなく中央集権的官僚政治が一貫して行われたという。なるほど禅讓革命が行われた時代にあつても天子の専制権力は必ずしも弱かつたと断定できないが、王朝末期においてはこの意味で分権的封建制が暫時的に存在したと言えまいかと思う。しからばこういう一時的封建王国の間歇的出現をもつて中国中世社会の特質とも考えられよう。」とある（五七頁）。

(93) 衛広来『漢魏晉皇權嬪代』（書海出版社、二〇〇二、初出は二〇〇一）第四章第一節「求才令与漢魏嬪代」、三五八～三五九頁。

(94) 菊地大「曹操と殊礼」（『東洋学報』第九四卷第一号、二〇一一）一～二六頁。

(95) ここでの「五等」について、『孟子』万章下には、「天子一位、公一位、侯一位、伯一位、子・男一位、凡五等也。」とある。『白虎通』卷一・爵には、「天子者、爵称也。爵所以称天子何。王者父天母地、為天之子也。」とある。

(96) 徐冲「『献帝起居注』与献帝朝廷の歴史意義」（『華東師範大学学报（哲学社会科学版）』二〇一八年第四期）四〇～四九頁。

(97) 『資治通鑑』卷六八・献帝建安二十三年正月条。

(98) 『資治通鑑』卷六八・献帝建安二十四年九月条。

(99) 柳春新『漢末晋初之際政治研究』（岳麓書社、二〇〇六、初出は一九九七）上篇第六章「『魏諷謀反案』析論」、七九～八八頁。

(100) 『三国志』卷一・武帝紀注引『魏略』。

(101) この過程には、嫡妻・嫡子の名号のみならず、諸王子・王女・王孫などの爵命の号の変化も含まれている。

【附記】 本稿は、二〇一八年度東北史学会大会での報告をもとに加筆修正したものである。席上貴重な意見を下さった松浦千春先生、内田昌功先生に、心より御礼申し上げます。